

港に着いた黒んぼ

小川未明

青空文庫

やつと、十とおばかりになつたかと思おもわれるほどの、男おとこの子が笛ふえを吹ふいています。その笛ふえは、ちようど秋あき風かぜが、枯かれた木きの葉はを鳴ならすように、哀あわれな音おとをたてるかと思おもうと、春はるのうららかな日ひに、緑みどりの色いろの美うつくしい、森もりの中なかでなく小鳥こどりの声こゑのように、かわいらしい音おとをたてていました。

その笛ふえの音ねを聞きいた人ひと々びとは、だれがこんなじょうずに上じょうず手に、また哀あわれに笛ふえを吹ふいているのかと思おもつて、そのまわりよに寄よつてきました。するとそれは、十とおばかりの男おとこの子こで、しかもその子こ供どもは、弱よわ々よわしく見みえたうえに、盲めくら目めであつたのであります。

人々ひとびとは、これを見みて、ふたたびあつけにとられていました。

「なんとという、不ふ憚びんな子こ供どもだろう？」と、心こころに思おもわぬものはなかつた。

しかし、そこには、ただその子こ供どもが、一人ひとりいたのではありませぬ。その子こ供どもの姉ねえさんとも見みえる十六うつく、七むすめの美うつくしい娘むすめが、子こ供どもの吹ふく笛ふえの音ねにつれて、唄うたをうたつて、踊おどつていたのであります。

娘むすめは、水みず色いろの着き物ものをきていました。髪かみは、長ながく、目めは星ほしのように輝かがやち澄すんでいました。そして、はだしで砂すなの上うえに、軽かるやかに踊おどつてゐる姿すがたは、ちようど、花はな弁びらの風かぜに舞まう

ようであり、また、こちよの野に飛んでゐる姿のようでありました。娘は、人恥ずかし
 そうに低い声でうたっていました。その唄は、なんとという唄であるか、あまり声
 が低いので聞きとることは、みんなにできなかつたけれど、ただ、その唄をきいてい
 ると、心は遠い、かなたの空を馳せ、また、さびしい風の吹く、深い森林を彷徨つて
 いるように頼りなさと、悲しきを感じたのであります。

ひとびと
 人々は、この姉と弟が、毎日どこから、ここにやつてきて、こうして唄をうた
 い、美しい、またやさしい、乞食を見たことがなかつたからであります。

この二人は、まつたく親もなければ、他に頼るものもなかつた。この広い世界に、二人
 は、両親に残されて、こうしていろいろとつらいめをみなければならなかつたが、中
 も弱々しい、盲目の弟は、ただ姉を命とも、綱とも、頼らなければならなかつたので
 あります。やさしい姉は、不幸な弟を心から憫れみました。自分の命に換えても、弟の
 ために尽くすうと思ひました。この二人は、この世にも珍しい仲のよい姉弟であり
 ました。弟は、生まれつき笛が上手で、姉は、生まれつき声のいいところから、二人
 は、ついにこの港に近い、広場にきて、いつごろからともなく笛を吹き、唄をうたつて、
 そこに集

まる人々にこれを聞かせることになったのです。

朝日が上ると二人は、天気の日には、欠かさずに、ここへやってきました。姉は、盲目の弟の手を引いてきました。そして、終日、そこで笛を吹き、唄をうたつて、日が暮れるころになると、どこへか、二人は帰つてゆきました。

日が輝いて、暖かな風が、柔らかな草の上を渡るときは、笛の音と唄の声は、もつれあつて、明るい南の海の方に流れてゆきました。

姉は、毎日のように、こうして踊つたり、唄をうたつたりしましたけれど、弟の笛の音を聞くと、いつも、疲れるということをしも身に覚えませんでした。

元来内気なこの娘は、人々がまわりにたくさん集まつて、みんなが目を自分の上に向けていると思うと恥ずかしくて、しぜん唄の声も滅入るように低くはなりましたけれど、そのとき、弟の吹く笛の音に耳を傾けると、もう、自分は、広い、広い、花の咲き乱れた野原の中で、ひとり自由に駆けているような心地がして、大胆に、身をこちようのように軽く跳ね上げて、おもしろく踊つていたのでした。

ある夏の日のことでありました。その日も太陽は、早くから上がつて、みつばちは花を探ねて歩き、広場のかなたにそびえる木立は、しよんぼりと静かに、ちようど脊の高い

人が立つているように、うるんだ空の下に浮き上がって見えませんでした。

港の方では、出入りする船の笛の音が、鈍く聞こえていました。明るい、あめ色の空に、黒い煙の跡がわずかに漂っている。それは、これから、青い、青い波を分けて、遠く出てゆく船があるのであります。

その日も、二人のまわりには、いつものごとく、ひとが黒山のように集まっています。「こんないい、笛の音を聞いたことがない。」と、一人の男がいました。

「私は、ほうぼう歩いたものだが、こんないい笛の音を聞いたことがなかった。なんだかこの笛の音を聞いていると、忘れてしまった過去のこと、一つ、一つ心の底に浮かび上がって目に見えるような気がする。」と、他の一人の男がいました。

「あれで目が見えていたら、どんなかわいい男の子でしょう。」と、ある一人の女がいました。

「私は、あんな器量よしの娘を見たことがない。」と、他の年をとった、荷物をついだ旅の女らしい人がいました。

「あれほどの器量なら、こんなことをしていなくてもよきそうなものだ。あんな美しい娘なら、だれでももらい手があるのに。」と、脊の低い男がのびあがって、あちらを見な

がら、いつていました。

「きつと、あれには、だれかついているものがあるでしょう。そして、金もうけをしようというのでしよう。」

「いいえ、あの娘は、そんな下卑た子供ではありません。きつと、あの弟のために、こうして苦勞をしているのです。」と、きつきから黙つて、じつと娘の踊るのを見ていた女の人がいいました。

人々は、思い思いのことをいきました。中には、金を足もとへ投げてやったものもありました。中には、いろいろのことをしやべりながら、いつか消えるように、銭もやらずに去つてしまつたものもありました。

つつがなく、やがて、その日も暮れようとしていました。海の上の空を、いぶし銀のようになつて、西に傾いた夕日は赤く見えていました。人々は、おいおいにその広場から立ち去りました。うす青い着物をきた姉は、弟をいたわつて、自分たちもそこを去ろうとしたときであります。

一人の見なれない男が、姉の前に進み出ました。

「この町の大尽のお使いでまいつたものです。ちよつと大尽がお目にかかつてお話し

たいことがあるからいらつしてくださるように。」といいました。

姉は、これまでこんなことをいったものが、幾人もありましたから、またかと思いましたが、その大尽というのは、名の聞こえている大金持ちだけに、娘はすげなく断ることもできないという気がして、少なからず当惑いたしました。

「どんなご用があつて、わたしにあいたいと申されるのですか？」と、姉は、その使いの男にたずねました。

「私にはわかりません。あなたがいらしてくださればわかることです。けつして、あなたのお身にとつて悪いことではないことだけはたしかであります。」と、その男は答えました。「わたしは、弟を置いて、どこへもいくことはできません。弟を連れていってもいいのでしようか？」と、姉はたずねました。

「弟さんのことは、聞いてきませんでした。大尽は、なんでもあなた一人に、お目にかかつてお話をしたいようです。けれどけつして手間を取らせません。あすこへ馬車を持ってきています。それに、日も、まだまったく暮れるには間がありますから……。」と、その男はいいました。

姉は、黙つて、しばらく考えていましたが、なんと思つたか、

「そんなら、きつと一時間以内に、ここまで帰してくださいませか。」と、男に向かつてたずねました。

「おそらく、そんなには時間を取らせませんまい。どうか、せつかく使いにまいった私の顔をたてて、あの馬車に乗って、一刻も早く大尽の御殿へいらしてください。いまごろ大尽は、あなたの見えるのをお待ちでございます。」と、男はいいました。

あちらに、草の上になすわって、手に笛を持つておとなしく、弟は、姉のくるのをまつていました。

姉は、思案に沈んだ顔つきをして、着物のすそを夕風になぶらせながら弟のそばへ、はだしのまま近寄つてきました。そして、目は見えぬながら微笑んで、姉を迎えた、弟に向かつて、

「姉さんは、ちよつと用事があつていつてくるところがあるのよ。おまえは、どこへもいかずに、ここに待つてておくれ、すぐに姉さんは帰つてくるから。」と、やさしくいいました。

弟は、盲目の目を、姉の方に向けました。

「姉さんは、もう帰つてこないのではないの。僕は、なんだかそんなような気がするんだ

もの。」といいました。

「なぜ、そんな悲しいことをいうの。姉さんは、一時間とたたないうちに帰ってきてよ。」
と、姉は、目に涙をためて答えました。

弟は、やつと姉のいうことがわかったみえて、黙つてうなずきました。

姉は、使いの男につれられて、いかめしい馬車に乗りました。馬車は、ひづめの音を砂地の上にあたてて、日暮れ方の空の下をかなたに去りました。

弟は、そのひづめの音が遠く、かすかに、まったく聞こえなくなるまで、草の上ですわつて、じつと耳を澄ましていました。

一時間はたち、二時間はたつても、ついに姉は帰つてきませんでした。いつしか、日はまったく暮れてしまつて、砂地の上は、しつとりと湿り気を含み、夜の空の色は、藍を流したようにこくなつて、星の光がきらきらと瞬きました。港の方は、ほんのりとして、人なつかしい明るみを空の色にたたえていたけれど、盲目の弟には、それを望むこともできませんでした。

ただ、おりおり、生温かな風が沖の方から、闇のうちを旅してくるたびに、姉の帰るのを待つている弟の顔に当たりました。弟は、もはやたえられなくなつて、泣いていま

した。そして、姉は、どこへいったらう。もうこれぎり帰ってこなかったらどうしよう
 心こころほそ細ほそくなつて、涙なみだが流ながれて止とまらなかつたのであります。

いつも姉は、自分の吹く笛の音につれて、踊おどつたと思おもうと、弟は、もし自分の吹いた笛
 の音ねを聞ききつけたら、きつと姉は、自分を思おもい出だして帰かえつてきてくれるにちがいないと思おも
 いました。

弟は、熱ねつ心しんに笛ふえを吹ふき鳴なりました。かつて、こんなこころいに心こころを入れて、笛ふえを吹ふいたこと
 はなかつたのであります。姉は、この笛ふえの音ねをどこかで聞ききつけるであらう。聞ききつけた
 ら、きつと自分じぶんを思おもい出だして帰かえつてきてくれるにちがいない、と、弟おとうとは思おもいました。弟は、
 それで、熱ねつ心しんに笛ふえを吹ふき鳴なりました。

ちやうど、ここに一羽わの白はく鳥ちようがあつて、北きたの海うみで自分じぶんの子供こどもをなくして、心こころを傷いため
 て、南みなの方ほうへ帰かえる途とちゆう中ちゆうであります。

白はく鳥ちようは黙だまつて、山やまを越こえ、森もりを越こえ、河かわを越こえて、青あおい、青あおい海うみを遠とほく後あとにして、
 南みなの方ほうをさして旅たびをしていました。白はく鳥ちようは疲つかれると流ながれの辺ほとりに降おり、翼つばさを休やすめて、ま
 た旅たびに上のぼりました。かわいこどもい子供こどもをなくして、白はく鳥ちようは、歌うたう気きにもなれなかつたので
 す。ただ、黙だまつて暗くらい夜よるを、星ほしの下したを駆かけていました。

白鳥は、ふと、悲しい笛の音をききました。それは、普通の人の吹く笛の音色とは思われない。なんでも胸になやみのあるものが、はじめてこんな笛の音色を出し得ることを白鳥は知りました。白鳥は、子供をなくして、しみじみと悲しみを味わっていましたから、その笛の音色をくみとることができたのです。

白鳥は、その目に見えない細い糸の、切れては、また、つづくような、悲しい音色がどこから聞こえてくるかと翼をゆるやかに刻んで、しばらくは夜の空をまわっていました。だが、やがて、広場から起こることを知りました。白鳥は、注意深くその広場に降りたのであります。そして、そこに、一人の少年が草の上にすわって、笛を吹いているのを見ました。

白鳥は、少年に近づきました。

「どうして、こんなところに、たった一人で笛を吹いているのですか。」とたずねました。盲目の少年は、やさしい声で、だれかこうしんせつに聞いてくれましたので、少年は、姉が自分をここに置いて、どこへかいつてしまったことをありのままに告げました。

「ほんとうに、かわいいそうに。わたしが、姉さんにかわってめんどうを見てあげます。わ

たしは、子供をなくした白鳥です。これから、あちらの遠い国へ帰ろうと思つています。二人は、南の国へいつて、波の穏やかな岸辺で笛を吹いたり、踊つたりして送りましよう。わたしは、いまあなたをわたしとおなじ白い鳥の姿にしてあげます。海を越え、山を越えてゆくのですから……。一と、白鳥はいいました。

ついに、盲目の少年は、白い鳥となりました。夜のうちに、二羽の白鳥は、このさびしい、暗い広場から飛びたつて、ほんのりと明るく、空を染めた港を見下ろしながら、その上を過ぎて、遠くいずこへとなく、消え去つてしまつたのであります。後には、空に星が輝いていました。大地は黒く湿つて、草木は音なく眠つていました。

姉は、それから程経て、大尽の屋敷からもどつてきました。思つたより、たいへんに時間がたつたので、弟はどうしたろうと心配してきたのであります。けれど、そこには、弟の姿が見えませんでした。どこを探ねても見えませんでした。星の光が、かすかに地上を照らしています。そこには、いまままで目に入らなかつた月見草が、かわいらしい花を開いていました。そして、これもいままで見なかつた、姉の青い着物のえりに、寶石が星の光に射られて輝いていました。

明くる日から、姉は、狂人のようになつて、すはだしで港の町々を歩いて、弟を探

しました。

月の光が、しつとりと絹糸のように、空の下の港の町々の屋根を照らしています。その、果物屋には、店頭には、遠くの島から船に積んで送られてきた、果物がならんでいました。それらの果物の上にも、月の光が落ちるときに、果物は、はかない香りをたてていました。また、酒場では、いろいろの人々が集まって、唄をうたったり、酒を飲んだりして笑っていました。その店頭のガラス戸にも、月の光はさしています。また、港にとまっている船の旗の揺れている、ほばしらの上にも月の光は当たっています。波は、昔からの、物憂い調子で、浜に寄せては返していました。

姉は、あてもなくそれらの景色をながめ、悲しみに沈みながら、弟をさがしていました。けれど、弟は、どこへいったのかわかりませんでした。

一日、この港に外国から一そうの船が入ってきました。やがて、いろいろなふうをした人々が、港の陸へうれしそうに上がってきました。なんでも、南の方からきたので、ひとびとすがたが、港の陸へうれしそうに上がってきました。なんでも、南の方からきたので、人々の姿は軽やかに、顔は日に焼けて、手には、つるで編んだかごをぶらさげていました。それらの群れの中に、見なれない、小人のように脊の低い、黒んぼが一人混じっていました。

黒んぼは、日当たりの途を歩いて、あたりを物珍しそうに、きよろきよろとながめながらやってきますと、ふと、町角のところ、うす青い着物をきた娘に出あいました。娘は黒んぼを、物珍しそうに振り返りますと、黒んぼは立ち止まって、不思議そうに、娘の顔を見つめていましたが、やがて近寄ってまいりました。

「あなたは、南の島で、唄をうたつていた娘さんではありませんか。いつ、こちらにいられたのですか。私は、あちらの島をたつ前の日に、あなたを、島で見ましたはずですが。」と、黒んぼはいいました。

姉は、不意に問いかけられたのでびつくりして、

「いえ、わたしは南の島にいたことはありません。それはきつと人違です。」と答えました。

「いや、人違いでない。まったくあなたでした。水色の着物をきて、盲目の十ばかりになる、男の子が吹く笛の調子に合わせて、唄をうたつて踊っていたのは、たしかにあなただです。」と、黒んぼは疑い深い目つきで、娘をながめながらいいました。

姉は、これを聞くと、さらにびつくりしました。

「十ばかりの男の子が笛を吹いている？　そして、その子供は盲目なんですか？」

「それは、島でたいした評判でした。娘さんが美しいので、島の王さまが、ある日金の輿を持って迎えにこられたけれど、娘は弟がかわいそうだといって、お断りしてゆきませんでした。その島には、白鳥がたくさんいますが、二人が笛を吹いたり、踊ったりしている海岸には、ことにたくさんな白鳥がいて、夕暮れ方の空に舞っているときは、それはみごとであります。」と、黒んぼは答えて、それなら、やはり、この娘は人違いかというような顔つきをしていました。

「ああ、わたしは、どうしたらいいだろう。」と、姉は、自分の長い髪を両手でもんで悲しみました。

「もう一人、この世の中には、自分というものがあつて、その自分は、わたしよりも、もつとしんせつな、もつと善良な自分なのであろう。その自分が、弟を連れていってしまつたのだ。」と、姉は胸が張り裂けそうになつて、後悔しました。

「その島というのは、どこなんですか。わたしは、どうかしていつてみたい。」と、姉はいいました。

黒んぼは、このとき、港の方を指さしながら、
「ずっと、幾千里となく遠いところに、銀色の海があります。それを渡つて陸に上がり、

雪の白く光った、高い山々が重なっている、その山を越えてゆくので、それは、容易にゆけるところでない。」と答えました。

このとき、夏の日は暮れかかって、海の上が彩られ、空は、昨日のように真っ赤に燃えて見られました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「童話」

1921（大正10）年6月

※表題は底本では、「港《みなと》に着《つ》いた黒《くろ》んぼ」となっています。

※初出時の表題は「港に着いた黒んぼの話」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：富田倫生

2012年5月23日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

港に着いた黒んぼ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>